

# 経済・金融 フラッシュ

## 7月マネー統計:

資金需要の減少続き、銀行貸出は8ヶ月連続の前年割れ

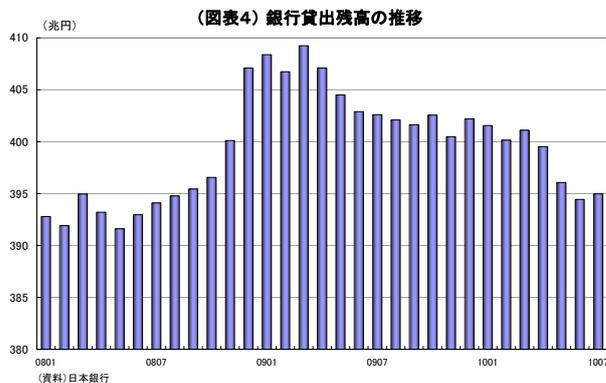
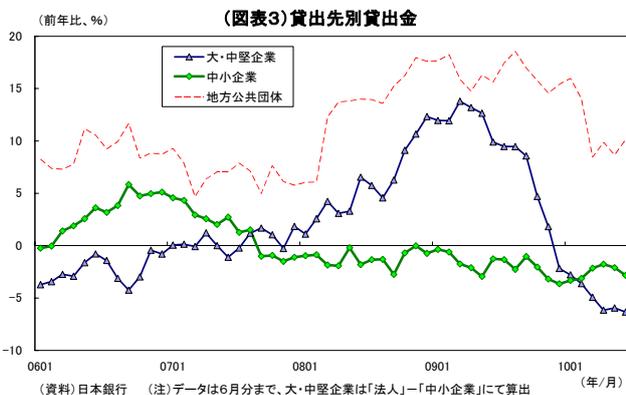
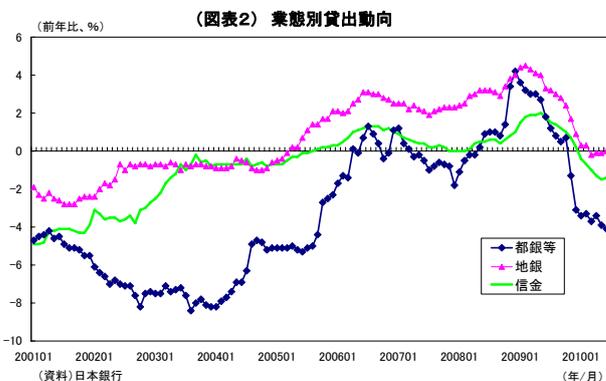
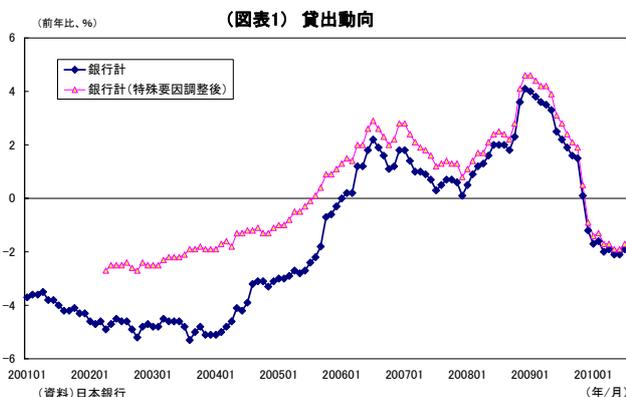
経済調査部門 シニアエコノミスト 上野 剛志

TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

### 1. 貸出動向: 8ヶ月連続の前年割れ

日銀が発表した貸出・資金吸収動向等によると、7月の銀行総貸出(平残)の前年比伸び率は▲1.9%と、8ヶ月連続の前年割れとなった(前月は同▲2.1%)。地銀(第2地銀含む)は前年比横ばい(0.0%)で推移しているが、都銀等(同▲3.7%)では大幅なマイナスが続いている(図表1~4)。

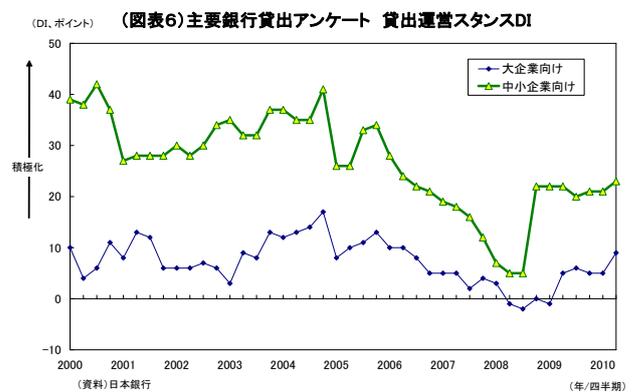
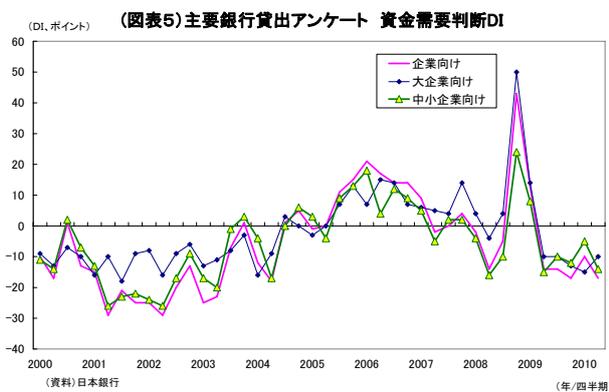
日銀による「成長基盤強化を支援するための資金供給」が来月から開始される。研究開発や環境などの分野への投融資に取り組む金融機関に対して、日銀が年0.1%の低利で資金を供給するものである。1金融機関1500億円、総額3兆円の上限があること(⇔銀行貸出はこの1年で約8兆円減)、現在の資金需要低迷は金利の問題というよりも世界経済の先行き不安にあるとみられることなどから、実効性には疑問も残る。ただし、銀行貸出にとって久々のプラス要因ではあるだけに、動向が注目される。



## 2. 主要銀行貸出動向アンケート調査：資金需要の減少が続く

主要銀行貸出動向アンケート調査によれば、2010年4-6月期の銀行から見た企業の資金需要増減を示す資金需要判断D.I.は▲17と前期から7ポイント悪化、資金需要の減少が続いているという結果となった。大企業の▲10(前期比5改善)に対し、中小企業では▲14(同9悪化)と、特に中小企業での資金需要減少が顕著のようだ。減少理由としては、大企業では「他の調達手段へのシフト」「資金繰りの好転」を挙げる割合が高い一方、中小企業では「設備投資の減少」「売上の減少」といった後ろ向きな理由の割合が高い(図表5)。

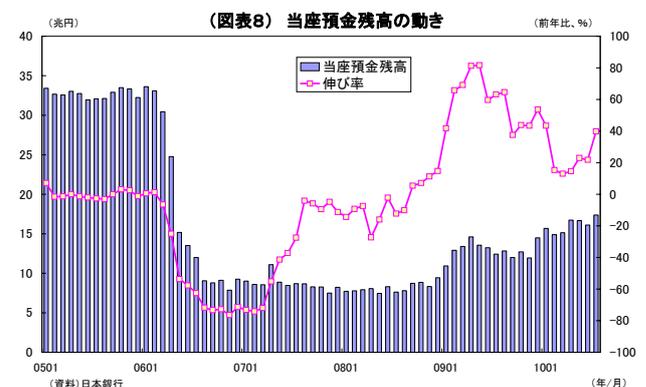
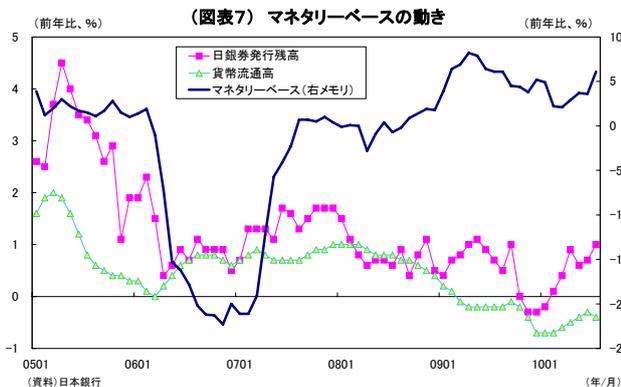
一方、銀行の貸出運営スタンスの変化を示す貸出運営スタンスD.I.は、大、中小企業ともに改善、プラスを維持しており、引き続き貸出運営を積極化しているとの結果になった(図表6)。



## 3. マネタリーベース：平均残高は4年3カ月ぶりの高水準

日銀による資金供給量を示す7月のマネタリーベースは、前年同月比6.1%増と前月の同3.6%増から上昇し、11ヶ月ぶりの伸び率となった。前年比プラスは23ヶ月連続。日銀が高水準の資金供給を行った結果、日銀当座預金残高が同39.8%と高い伸びを示した。

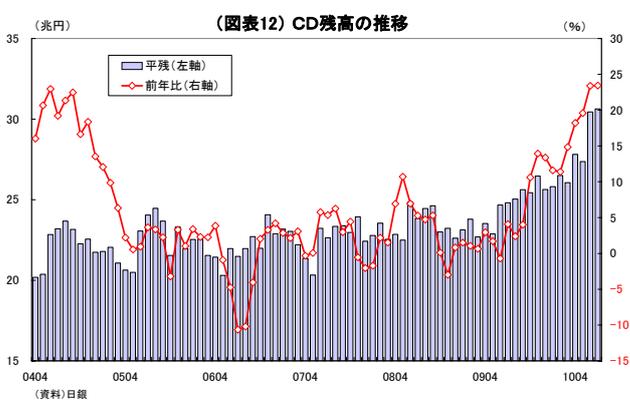
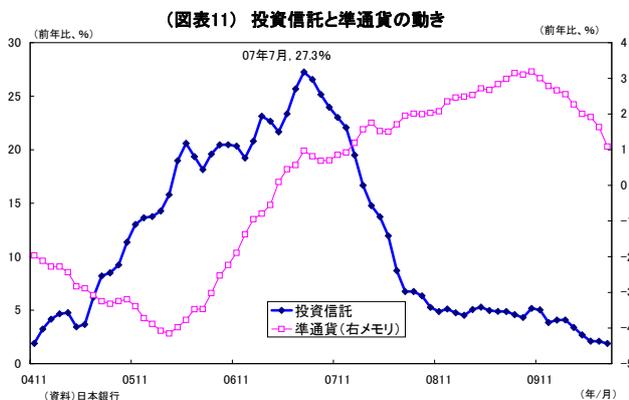
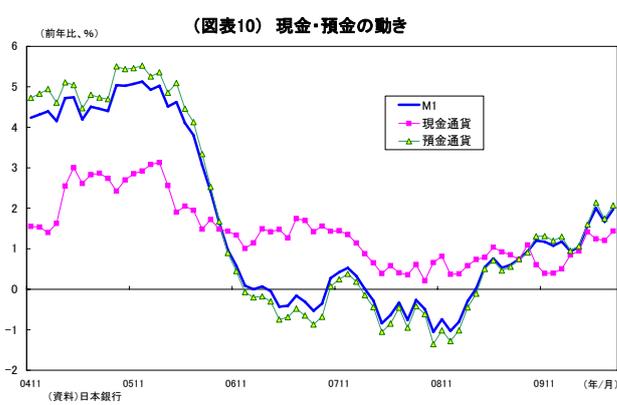
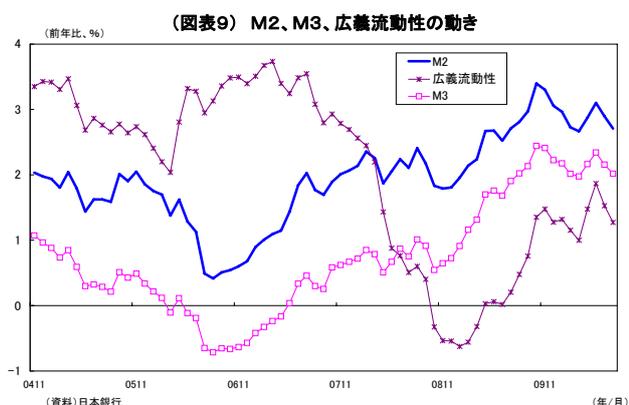
マネタリーベースの平均残高(98.9兆円)は量的緩和終了直後の2006年4月以来の高い水準にある。一方、3月に資金枠を拡大した新型オペの残高は6月半ばに上限の20兆円に達したため、上限が変わらない限り同オペによるこれ以上の追加緩和効果は出ないが、世界経済の不透明感の高まりや財政政策の手詰まり感を背景として、日銀の緩和姿勢は今後とも維持されるとみられる。マネタリーベース残高は引き続き高い水準で推移していく可能性が高い(図表7,8)。



#### 4. マネーストック：一部で手元資金滞留の動き

通貨供給量の代表的指標である7月のM2（現金、国内銀行などの預金）平均残高は前年同月比 2.7%増（前月は 2.9%増）、M3（M2 にゆうちょ銀など全預金取扱金融機関の預貯金を含む）は同 2.0%増（前月は 2.2%増）、M3 に投信や外債などを含めた広義流動性は同 1.3%増（前月改定値は 1.5%増）と、それぞれ前月からやや伸びが鈍化した（図表9）。

なお、従来高い伸びが続いていた準通貨（定期預金など）の伸びが鈍化する一方、流動性の高い預金通貨（普通・当座預金）や主に法人が短資運用に利用するCD（譲渡性預金）では高い伸び率を示す傾向がここ数ヶ月続いている。企業収益が回復する一方で、投資需要はまだ鈍く、一部企業の手元資金が流動性の高い預金に滞留している姿がうかがわれる（図表10～12）。



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。